

■■■■■■ 紹 介 ■■■■■■

ロア・ベークセット  
『中文不規範簡体字字典』

大 林 洋 五

漢字には古来さまざまな異体字（意義・発音とも同一であるが字形が異なる文字）が使われてきた。なかでも字画が多く、使用瀬度の高い文字は、略字が用いられることが多かった。国語・文字政策のなかで、大衆化が特に強調される時期には、それらの略字が正体として公認されることも多かった。日本の1946—48年の国語審議会の一連の決定などもこれである。中華人民共和国も、1956、1964年に異体字の整理と簡略化がおこなわれた。この際、旧来の字体を繁体字と呼び、簡体字を略字でなく正体とした。しかし、ここで公認された以外にも、各地方、各分野で広く使われる略字は多数あり、使用者のなかには、それをすでに公認されたものと思いこんでしまっているものさえある。簡略化のしかたも、単純に字画を減らすものから、複合漢字の場合には意義により（会意）、また同一もしくは近似の発音の素字の組合わせにより（形声）、全く別の意義だが同一または近似の発音の字で代用する（仮借）方法などがとられているのは、漢字発展の場合と同様である。それらの簡体字には、「同文だから看板や掲示は読める」と思っている日本人旅行者などは面くらうことも多いようである。

---

（ロア・ベークセット氏はノルウェー人、スウェーデン、ルント大学卒業。モスクワ大学、北京大学、山口大学、南京大学等に留学。現在ストックホルム在住）

ロア氏は二度、五年にわたる中国留学と数回の中国旅行中、足で集めたこれらの、正規でない略字（不規範簡体字）の一部、1600字を、ポケット版の字典として公表した。全体で100ページの小冊子ながら、不規範簡体字→公認の字体、公認の字体→不規範簡体字の両引きであり、配列も、漢字文化圏外の研究者にも引きやすいよう工夫がこらされている。

中国では文化大革命に一層の簡略化をおこなおうと準備し、1977、81年もその草案が作られたが、文化大革命終息以降は簡略化にブレーキがかかり、(1986年1月北京で開催の全国語言文字工作会議での劉導生報告など) 77、81年案も棚あげされ、雑誌『文字改革』も『語文建設』と改題された。むしろ正体字の普及徹底がはかられているようである。しかし、かなり普及した簡体字は、それなりの意味を持っており、またそれらの簡体字が収録された地域も記録されているので、形声、仮借などの方法で簡略化された字などは、各々の方言（発音の訛）などの研究にも参考となるであろう。

Roar Bökset: A Dictionary of Nonstandard Simplified Chinese Characters (The Society for Oriental Studies, Stockholm, 1986)